

鯨

日本の城の屋根を見ると、2 匹の鯨、虎の頭に魚の胴体を持つ想像上の生き物を大抵見つけることができる。鯨は水とゆかりがあるため、火除けとして取り付けられた。他には水を想像させる波や魚もよく使われる。鯨は屋根の中央の棟の両端に取り付けられ、天に向かった尾びれは特徴ある天守の一部を形作っている。

姫路城の天守は 7 代に渡る陶製の鯨によって守られてきた。城の屋根瓦のように、鯨も徐々に風雪にさらされて劣化してしまう。ここでは、5 代目、6 代目の鯨と現行の鯨のレプリカが展示されている。それぞれ設置された時代の名前が付けられている。

明治の鯨

この鯨は 1910 年、明治時代（1868-1912）末期に行われた城の大修理の際に作られた。5 代目の鯨として大天守の東端を守ってきたこの鯨と対になる鯨は 1950 年代と 1960 年代の大修理の際に西側の対と入れ替えられた。

台座の碑文によると、この鯨は城の西隣にある龍野町で大古瀬市左衛門（年代不明）が作ったものとされている。大古瀬は龍野町に住んでいた瓦師の一家の五代目当主である。

昭和の鯨

この一対の鯨は 6 代目のもので、1956 年から 1964 年の”昭和の大修理”の際に取り付けられた。この鯨は大天守の二階部分で見つかった小型の鯨を原型として作られた。元の鯨には 1687 年と銘があり、城内で現存する最も古い鯨と考えられている。昭和の大修理の際には最上層の大型 2 匹を含む合計 11 の鯨が大天守のために取り替えられた。あなたはいくつ見つけられるだろうか？

平成の鯨

2011 年 11 月に新しい鯨 2 匹が製作され、2010 年代の城の大修理の一環として、翌年 2 月に取り付けられた。職人は損傷に備えて予備の鯨の製作をしていたが、ここに展示されているのはそのうちの一つである。屋根にある鯨と同じ大きさで 1.9 メートルの高さと 3 0 0 キロの重さがある。

7 代目の鯨は先代である昭和の鯨に忠実に作られた。しかしながら、製陶技術が向上したため、新しい 2 匹の鯨に開けられた穴の数は昭和の鯨よりも少ない。この穴は焼成時に熱を逃がし、ひび割れを防ぐために必要なものである。